



# 芸(術)は脳を助ける？

会員 田中 和恵 (59期)

3年ほど前、文字がうまく書けなくなっていることに気づきました。手書きで文字を書こうとして、正確に漢字が書けているか自信がないことなどが多くなっていたのです。キーボードではすらすら打つことができ、変換された漢字候補の選択に迷うこともほとんどありません。ただ、手で文字を書こうとすると、文字の形が頭の中にはっきり浮かびません。PCが次々に文字の候補を挙げてくれるので、その形を日頃ははっきり認識しなくとも支障なく文書作成ができており、これによって文字の形の詳細を頭に入れないようになっていたようです。日常使う機能が高まり、使わない機能が退化する、これは進化の過程であるとポジティブにとらえることもできそうです。ただ、手書きが必要な場面で漢字が書けない自分を想像すると社会人として恥ずかしく感じられ、何とかこの脳の退化を食い止めなければと考えました。

文字の形といえば、書道です。子供のころにやっていた書道を再開しようかとも思いました。たまに私の手書きを目にする所属事務所の職員は到底信じてくれないと思いますが、子供のころ、書道5段だった私。高校の書道の授業で、先生に、私の書いた「か」という字の右上の点はどのようにしてその位置に、その長さで書いたのと聞かれ、自分がなんとなく文字を書いていたことに気づき、点一つでも考えつつ書くのが書道かと開眼したことを思い出しました。紙という真っ白な世界に、文字の構成部分をどのように表せば、見た人に文字の美しさや文字からなる言葉の意味が伝わるのか。親から強制されて始めたお習字が芸術である書道になった瞬間でした。

書道を再開すれば、文字を再現する力が復活するかも。ただそこで、浮かんだのが当時の私の白と黒に囲まれた生活。業務で書類を多く作成しますが、白い書類上で黒以外の文字を使用することはありません。日常



着ているものとはいうと、基本的に黒かグレーのスーツばかり。これは、業務の必要からではなく、朝の服選びの時間の短縮のためにどのような場面でも問題がなさそうなものを選び続けた結果です。

書道もいいけど、いろんな色を使う芸術のほうが楽しいかも。しかし、私に絵画のセンスは皆無で、絵画教室に通ったところでストレスになるのは目に見えていました。そこで、無からの創作は諦め、美しいガラスの組み合わせによる創作であるスタンドグラスの教室に飛び込みました。とはいえ、スタンドグラスも芸術の一樣態ですから、やはりセンスのなさでは苦勞しっぱなしです。加えて、やることなすこと雑なので、イタリア人の先生から「マンマミーア！（なんてこった）」を連呼されます。

現在6つ目の作品を制作中。脳の退化が食い止められているかはわかりません。それでも、創作にあたり物や景色を再現する必要に迫られ、日頃から物の形や色をよく観察する習慣は身につけてきました。同じ通勤の経路であっても、作品のモチーフを探しながら歩くことで、これまで見過ごしていた植物や鳥の存在に数多く気づくこともできました。これらの美しさに感動したり、好奇心を掻き立てられたりと、日頃とは違う脳への刺激は実感できています。